

全国アンケート調査に見る、ボディパーカッション教育の可能性 —児童・生徒のコミュニケーション能力を高めるリズム身体活動の一考察—

山田 俊之

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2017年5月26日受付、2017年7月11日受理)

1 はじめに

我が国は、国際化、情報化、環境問題等の関心の高まりなど社会のさまざまな面で、急速な変化を遂げており、これらの変化を踏まえた新しい時代の教育のあり方が問われてきている。

児童・生徒が他者や環境との関わりの中で、共に学び、お互いに社会の一員として自覚を深め、豊かな人間形成をはぐくむために、児童・生徒のコミュニケーション能力の育成は教育現場において喫緊のテーマとなっている。

平成8年中央教育審議会第1次答申では、これからの学校教育の在り方として、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」の育成を基本として、総合的な学習の時間を設けることなどが提言されてきた。この「生きる力」とは何か、それは子ども達が成長して大人になって生きていくための力だと考える。その中で、重要なのは、他者との関わりの中で生きる力を培うこと、それはコミュニケーション能力を高めることであると考えた。

総合的な学習の時間のねらいに「自らの課題を見つけ、自ら学び自ら考えに主体的に判断し問題を解決する資質や能力を育てること。」とある。(1)今日のような激しい変化が予想される社会において、主体的に生きていくためには質の高い経験に基づき、自らの考えで判断し行動できる能力の育成を重視しなければならない。

デューイの言葉に「質的経験を整えることこそ、教育者に課せられた仕事なのである。何よりも重要なことは、その経験の質にかかっているのである。」とある。(2)学校教育においては、この経験の質をより高いものにし、その経験を生かして子どもたちが、今後豊かな人生が送れる羅針盤とならなければならない。

子どもたちが問題解決に向けて必要な情報を、発信するといった基礎的な能力の育成を図ることは、ますます重要になってくると考える。また、生徒が他者や環境との関わりの中で、共に学び、互いに社会の一員として自覚を深め、豊かな人間形成をはぐくむために、コミュニケーション能力の育成を目指した教育は一層必要になってくる。

学校現場に於いても児童・生徒同士が多様な文化や特徴・価値観を持ち、共に生きる共生社会が現実化している。このような学校生活の中で不可欠なのは児童・生徒自身が多様な他者、様々な事象を認識する事が必要だと考える。これからの児童・生徒がコミュニケーション能力を培うことは社会に主体的に参加し、対立や意見の違いを乗り越え、社会の変化に対

応していける力を培うことと考えている。

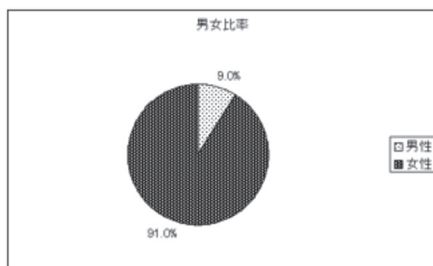
そこで、本研究は児童・生徒同士が非言語を中心にリズム身体表現を主体にした活動に取り組み、自己表現力を培うボディパーカッション教育を通して生徒のコミュニケーション能力を高める効果について、ボディパーカッション教育研修会受講生のアンケート調査に基づきその可能性について考察したい。

2 アンケート調査の概要について

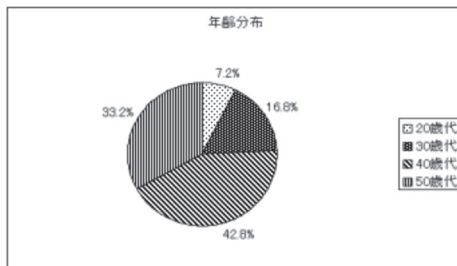
アンケート調査は過去筆者が行った「ボディパーカッション教育」講座(3)を受講した教職員名簿約5,000人の中から、アトランダムに抽出した全国約800人の教職関係者に送付し行った。具体的には、2008年(平成20年)～2015年(平成27年)までに約800通のアンケート送付を実施し、2015年3月までの回答者で集計を行った。結果、授業でボディパーカッション教育を実践した365名から回答があった。

回答した教職関係者の男女比率、教職経験年数、所属学校等は下記の結果である。男女比率は圧倒的に女性が多く(図1-1)、女性教職員の関心の高さが伺える。また、年齢分布では40代50代が圧倒的に多く、我が国の教職員の平均分布とほぼ一致している。(図1-2)

(図1-1)

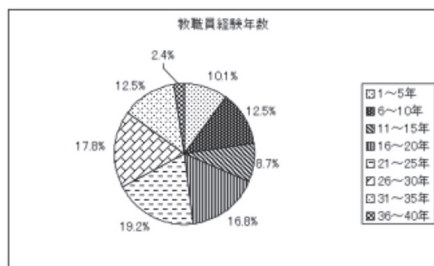


(図1-2)

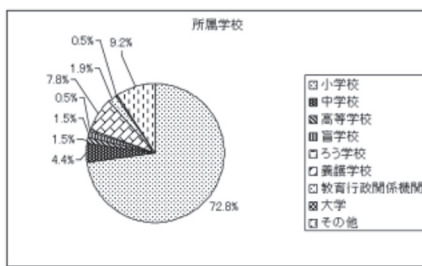


教職経験年数分布を見てみると10年から35年まで広く参加している。但し、経験5年未満の回答者数が少ないのは教職員の絶対数が少ないことに起因している。(図1-3) 教職経験年数と学校種別から分析すると、年齢分布に対応するように5年毎に均等に増えているのがわかる。

(図1-3)



(図1-4)



回答者の約70%が小学校教師と多いのは、筆者が小学校での実践を基に取り組んだ講座内容であるからと考えられる。(図1-4) さらには女性の比率が91%と多いことは、学級活動に加えて音楽的要素が強く関心を持たれたからだと考えられる。

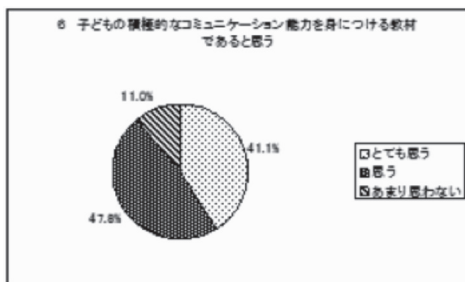
3 子どもの基本的な能力形成とコミュニケーション能力

コミュニケーション能力という言葉が広く使われるようになった。コミュニケーション能力が重要であるということは、最近の教育現場ではよく言われている。

平成20年3月に小・中学校学習指導要領が告示された。現行学習指導要領の理念である「生きる力」は不変であるが、コミュニケーション能力の基盤である言語活動は重要な要素になっている。そのことについて、中央教育審議会委員である八尾坂は「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。言語は『知的活動（論理や思考）』だけでなく、『コミュニケーションや感性・情緒』の基盤である。(中略) 特に小学校低・中学年においては、(中略) 基本的な国語の力を定着させることは、『生きる力』の育成で求める学力の第一義的基盤である。(中略) それゆえ各教科等においては、国語科で培った能力を基本に『知的活動』や『コミュニケーションや感性・情緒』の観点から、例えば以下の点を適用できる。(中略) 工. 音楽、体育等において、合唱や合奏、球技やダンスなどの集団的活動や身体表現(例：ボディ・パーカッション)などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする。オ. 音楽、図画工作、美術、体育等において、体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する。」(4)と述べており、ボディパーカッションがコミュニケーション能力を培う身体表現として取り上げられている。

(図2-1)

【子どものコミュニケーションを身につける教育であると思う】



また、コミュニケーションという言葉の語源はラテン語の (communicatio) に由来しており、『分かち合うこと』を意味している。またラテン語では共通の交わりという意味もあり児童・生徒がコミュニケーション能力を高めることは、共に生きる共生社会を創り上げる為にお互いが意志の疎通を図って気持ちを

分かち合うことにつながると考えている。よって、本論文における生徒のコミュニケーション能力とは英語: communication = ラテン語: communis (common, public, 共通の) communio (交わり, comm共に unio一致) + munitare (舗装する, 通行可能にする) と、語源から考え、児童・生徒達が共に生きる共生社会を創り上げる為、共に交わりお互いが意志の疎通を図ってお互いの気持ちを分かち合うことであると考えた。

また、大人社会のなかでも、コミュニケーション能力の欠如から、人間関係のトラブルを招くことが多い。これは、児童・生徒社会の中でも同じことが言える。児童・生徒のコミュニケーション能力とは何か、それは、意味を伝えること以外に、表情、身振り手振りなどで、感情表現を伝達することである。一方的に、情報を相手に流すだけでは、コミュニケーション能力ではない。

これからの学校や社会の役割は、生涯学習社会にふさわしい人間の育成であり、特に、その基礎づくりであることは当然である。常に課題意識を持ち、その課題解決に向かって学ぶ意欲を持ち続け、自分のペースで、主体的に学習に取り組む人間の育成を目指さなければならない。それは、コミュニケーション能力が高い子どもを育てることである。

4 特別支援教育から共生社会へ

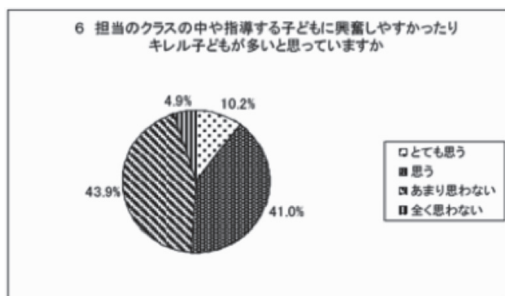
現在、特別支援教育の在り方が大きく見直され始めている。特別支援教育は、分離され個別対応による教育から、統合された共生を目指す教育へと方針が変わった。その動きの中で、さまざまな支援を必要とする生徒達が一つの教室の中で、ともに学ぶ機会が増えてきている。文部科学省報告（2005）では『東京都江東区で、現在最も多い学習支援講師派遣内容は発達障害によると思われる学習困難に対する支援である。』とある。現在は、この傾向がさらに全国的に広がっていると思われる。また、現在の小中学校では、発達障害と思われる児童生徒の割合が7～10%いると言われている。

中教審の答申にもあるように「小中学校において通常の学級に在籍するLD・ADHD・高機能自閉症等の児童生徒に対する指導及び支援が喫緊の課題になっており、『特別支援教育』においては、特殊教育の対象になっている幼児児童生徒に加え、これらの児童生徒に対しても適切な指導及び必要な支援を行うものである。」(10) という現実に直面している。

文部科学省に『これまでの「特殊教育」では、(中略)特別な場で指導を行うことにより手厚きめ細かい教育を行うことに重点が置かれてきた。「特別支援教育」とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。』(11) とある。

これは特別支援教育の方向性が共生社会を目指す教育へと変化していることを示している。

(図2-2)



左記の円グラフ(図2-2)を見ていただきたい。アンケートの中で「担当のクラスの中や、指導する子どもに興奮しやすかったり、キレル子どもが多いと思っていますか?」の設問に対して、10%の教師が「と

でも思う」、41%の教師が「思う」と回答している。つまり、約半数の教師が「指導する子どもが興奮しやすい、キレる子どもが多い」と答えている。このような現状は、合理的配慮の視点からは、教師の理解不足、児童生徒とのコミュニケーション能力不足が考えられる。また、児童生徒同士のコミュニケーション能力の違いや不足から生まれる差異がキレる子どもの状態を生んでいるのかもしれない。

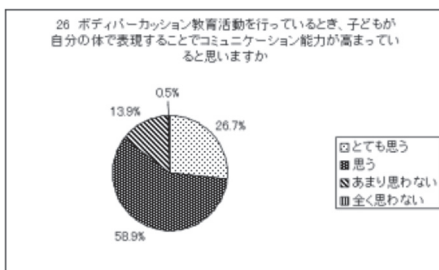
5 児童・生徒にとって非言語コミュニケーションの重要性

児童・生徒のコミュニケーション能力というのは、相手に言葉の意味だけではなく、感情が同時に伝わる必要がある。人と人とは、その人間関係を気持ちよく、密なものにしていくためには、相手とのコミュニケーションがスムーズに行く必要がある。児童・生徒同士で同じ遊びをしていて、その遊びの中に上手い、下手が出てくる。たとえば、一緒にサッカーや野球をしていても、その中で同時に、感情面での信頼関係を培う。そして、その「信頼関係がスムーズにいけば、友達同士で、トラブルが少なく、仲良く遊ぶことができる。」このコミュニケーション能力こそ、大人になって、仕事を行う場合にも大きく影響してくると考える。

特に、自閉傾向のある児童生徒や発達障害の場合は、コミュニケーション能力の違いによってトラブルが顕著に表れてくる。この場合は、言語によるコミュニケーションよりも、「視線が合わない」、「身振り」「手振り」が関心がないように感じる、「全く反応しない」などの非言語コミュニケーション不足からくる要素も大きな原因と考えられる。

ここで、下記アンケートの結果を見ていただきたい。まず、最初に「ボディパーカッション教育を行っているときに、子どもが自分の体で表現することでコミュニケーション能力が高まっていると思いますか？」(図2-3)の質問に対して、「とても思う」が約26%、「思う」が約58%で合計約85%に達している。また、「生徒同士が活動を行う時、アイコンタクトや身振り手振りでお互いの気持ちを表現できていると思いますか？」(図2-4)に対しても「とても思う」「思う」で約73%である。

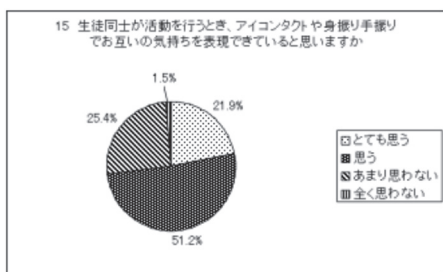
(図2-3)



コミュニケーションは、相手に言葉の意味だけではなく、感情が同時に伝わる必要がある。人と人とは、その人間関係を気持ちよく、密なものにしていくためには、相手とのコミュニケーションがスムーズに行く必要がある。左記のグラフ(図2-3)より、ボディパーカッション活動は自分の体でコミュニケーシ

ョン活動に有効であると85%の教師が認識していることがわかった。

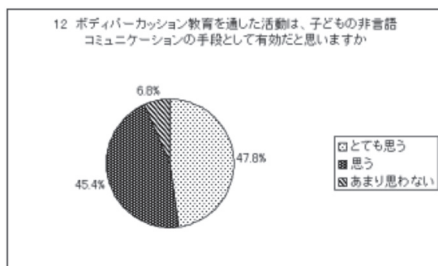
(図2-4)



クリエイティブなコミュニケーションというのは、会話の中だけでしか生まれないものだろうか。非言語コミュニケーションのなかでも生まれることがある。たとえば、子どもたちが休み時間に、サッカーで遊んでいる。お互いにパスを行い、得点につながるようなゴールを決め、お互いの信頼関係が増してくる。

これは、ボディパーカッション活動においても「アイコンタクトや身振り手振りでお互いの気持ちを表現できている」と答えた教師が70%を超えている。お互いにリズムを通して身体活動を行うことは、ノンバーバルなコミュニケーション活動といえるのではないだろうか。

(図2-5)



非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人、レイ・L・バードウィステルは、対人コミュニケーションをつぎのように分析している。「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35%にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間のとり方など、

ことば以外の手段によって伝えられる」(5)。この分析が示唆しているのは、幼児期や小学校中学年までの段階では「言葉ならざる言葉である顔の表情、身振り、手振り」の方が言葉や言語より重要だと考える。よって、ボディパーカッション教育は、特にアドリブ（即興演奏）などの「音楽づくり」を行う時、「顔の表情、身振り、手振り」がとても重要な要素となっており、非言語コミュニケーションの手段としてはとても有効であるという回答を得ている。

(図2-5)

6 キレル子どもとコミュニケーション能力の差異

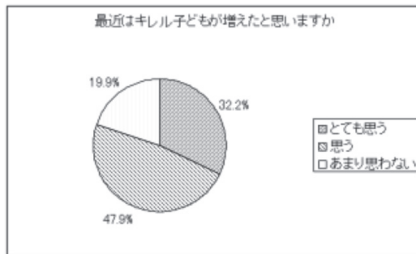
筆者は教師経験25年（小学校18年、特別支援学校7年）を経験した。その間に、時代の流れとともに子どもたちを取り巻く教育環境が大きく変わったことを実感している。

文部科学省による2012年発表の「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査」では、「急におこったり、泣いたり、うれしくなったりする」という自己評価の設問に対し、小学生の約60%から70%が、「よくあてはまる」ないしは「ややあてはまる」と答えている。

また、「わたしはいらいらしている」という設問では、小学生の30%弱、中高生の40%弱が「よくあてはまる」ないしは「ややあてはまる」と回答している。

上記のことは、「些細なことですぐ腹を立て、あとの結果も考えずに場当たりの暴力を振るう」昨今、児童生徒が起こす不可解な現象にも関連して、子どもたちのキレる心の原因を探ろうとする努力が、コミュニケーション能力の視点から解明されなければならないと考えている。

(図2-6)



「キレる」というのは「堪忍袋の緒が切れる」などの意味から、ストレスをコントロールできずに、感情を爆発させ、常軌を逸した行動をとることを意味していると考えられる。診断基準が確立されているわけでもなく、病気として果たして治療が必要なものであるのか明確になっていない。何が原因で、どこに異常があり、どのように対処すればよいのか、共通の理解が得られていないのが現状である。アンケート結果でも、約80%の教師が「最近キレる子どもが増えた」と感じている。(図2-6)

つまり、現在文部科学省が発表している全国の小中学校に通っている通常学級の児童生徒約6.5パーセントが発達障害もしくは、グレーゾーンにいる現状を考えると、児童生徒のコミュニケーション能力を高めることは教育界にとって喫緊の課題である。

この様な課題を解決するためにも、これからの児童・生徒がコミュニケーションをとることの難しさを実感し、やがては、他者とともに、主体的に参加、協働し、対立や意見の違いを乗り越え、社会を変革していく力を培うことだと考える。

そして、「友達」、「学校」、「地域」、「社会」に広がっていくこうした多様な人々・事象などと関わるためには豊かなコミュニケーション能力が必要である。子どもたちが悩んだり、考え込んだり、失敗したり試行錯誤しつつ、仲間と共に育っていく体験活動を重視することが必要ではないだろうか。

現在、学校現場では発達障害の児童生徒をはじめ、ジェンダー、諸外国から来た児童生徒の異文化など、多様な文化・価値観をもった人々が、共に生きる共生社会が現実化している。そのためにも、子どもたちが身近な人々とのネットワークを形成し、参加・協働した体験が、多様な人々との共感を高めていけるコミュニケーション能力の育成が必要になってくる。

キレる子どもを含めた児童・生徒コミュニケーション能力について考えてみたい。具体的要因としては児童・生徒の学力・気力・体力の低下傾向、様々な実体験の減少に伴う社会性やコミュニケーション能力等の不足である。いじめ、不登校、校内暴力等の学校病理問題の依然とした深刻化、仮想現実やテレビゲームの世界に過度に浸ったことも原因と考えられ、「キレる児童・生徒」の新たな教育課題と考えられる。

キレる子どもを含めた児童・生徒コミュニケーション能力について考えてみたい。具体的要因としては児童・生徒の学力・気力・体力の低下傾向、様々な実体験の減少に伴う社会性やコミュニケーション能力等の不足である。いじめ、不登校、校内暴力等の学校病理問題の依然とした深刻化、仮想現実やテレビゲームの世界に過度に浸ったことも原因と考えられ、「キレる児童・生徒」の新たな教育課題と考えられる。

児童生徒の頃から自分の意志伝達を明確に表現できなければならないと思っている。そこ

で、コミュニケーション能力を高める教材として、非言語コミュニケーションを多用できる「ボディパーカッション教育」を試みた。それは、生徒同士がお互いを理解し合う言葉以外に、身体を使ったコミュニケーションが大切な要素だからである。ボディパーカッション教育は生徒同士が身体を使ってリズム身体表現で思いを伝えながら、相手の気配を感じ、顔の表情、身振り、手振りでお互いが非言語のコミュニケーションを図る。言葉以上に感覚で相手のことを理解しそのことでお互いの信頼関係が増す。さらには、生徒同士の関わり合いの中から一体感や達成感などを育成できると考えている。そして、生徒自ら目標を設定し、お互いが力を合わせて解決していく力を育てるため、この非言語のコミュニケーションを重要な要素として考えている。

7 キレル子どもの対応から発祥したボディパーカッション教育

ボディパーカッション教育は、1986年小学校4年生を担当し、キレル男の子をきっかけに始まった。「ボディパーカッション」(body percussion)という名称は手拍子、お腹を叩く、膝を打つ、足踏み、ジャンプ、お尻を叩くなど身体の様々な所を叩いて音を出し、リズムアンサンブルを作り上げる事から筆者が名付けた造語である。(6)

1986年当時勤務していた田園地帯に校舎のある福岡県久留米市立A小学校である。農村地帯で各学年1クラスの小規模な小学校である。A男のことは、周りは慣れており、人間関係も定着していた。しかし、「キレル」状態になるのは小学校3年生頃から激しくなった。そして次のような事例が毎日のように起こっていた。

【キレル子どもの具体的事例】

「A男が暴れています！先生早くきて下さい。」女の子が叫んで職員室に入って来る。始業式から10日間続き、担任になって毎日、朝の職員朝礼の時、クラスの子も達が呼びにきた。慌てて階段を駆け上がり全速力で2階の教室までいく。怪我をしていないか、教室の扉を開けるまでは不安で一杯になる。ドアを開けて教室を見渡す、A男が教室のほぼ中央に立って回りは誰もいない、A男を中心に同心円を描き遠巻きに皆が見ている。一人の女の子が教室の隅で泣き、A男は肩で息をし、興奮状態が続いている。「どうした！」と聞くとA男は一点を見据え目に涙を溜めて何も答えない。周りの子どもに聞いてみると、A男がいつものように急に怒りだし、自分の机を足で蹴って倒し、いすを蹴り始めたようだ。興奮状態が落ち着くのをみて聞いた。A男は「B子が消しゴムを貸してくれなかった。」とぼつりと言った。教室の隅で泣いているB子ちゃんに聞いてみると「A男の言ったことがよく聞こえなかった。」と泣きながら答えた。

A男はぎつくと叱ると教室から出て行き運動場を逃げ回ってしまう。数日前は私と1時間ほど学校中をデットヒートした後、午前中はずっとA男の右手を持って授業を行った。しかし、興奮が静まると必ず教室に戻って来て何事もなかったようにしているのが常であっ

た。ある時は、生徒が私を慌てて呼びにきたので急いで教室に行ってみるとA男がいない。どこにいるのだろうかと教室を見回すとなんと木製のテレビの上にはいるではないか。当時は、18インチでも木製の頑丈な作りのテレビが教室前方の左側もテレビ用の台があり、なんとA男がそのテレビの上に乗っていたのである。そして、手に押しピンをもってみんなの方に向かって投げていた様子だった。思わず「A男！降りなさい」と叫んでA男を下ろした。

この日依頼、校長先生に相談して朝の職員朝礼行かず、教室に朝から直行することにした。それから、A男のことを何とかしたいと思うようになった。当時は勉強が苦手な運動も苦手な子どもはどこで自分の存在価値を見つけるのだろうかという教師として悩んでいる頃だった。A男がまさにこれに当てはまる生徒だった。

A男との信頼関係も出来始めた頃、給食準備の放送（モーツアルトの「アイネクライネナハトムジーク」）が聞こえてきた。今まで音楽の時間でもなかなか集中できなくて、歌や合奏にも興味を示さなかったA男がなんとその曲に合わせて手でリズムを取っている。その時、「誰もが参加でき楽しい授業をしたい！」という思いとA男をなんとか授業に参加させたいと願っていた気持ちが一緒になり、また、それが一番できるのは音楽の授業ではないかと考えた。最近のアンケート結果（図2-5、図2-6）からも、担任の先生は子どもが制止できず、興奮しやすくなっているのがわかる。

A男は授業中注意散漫でなかなか集中して物事を持続できない。そこが一番の課題だった。その年の夏休みに教材作りを始めた。教材のテーマはただ一つ「教師に集中しなければ参加できない教材」を考えることだった。子どもにとって（大人も同じ）、一番辛いことは他人から認められず、疎外感を味合うことだ。だから、A男が参加できる内容で自ら参加したと思える所属感が感じられる教材にすることを考え下記の点に気をつけた。

<言語的なもの>

- ・ 発問…できるだけ分かりやすい言葉で問いかける。
- ・ 指示…具体的に身体を使って具体的な演技を見せる。
- ・ 説明…言葉の説明は少なく、体や感覚（五感）で理解させる。

<非言語的なもの>

- ・ 態度…子どもと同じ感覚と目線で授業をする。
- ・ 動作…リラックスして心も体も自然体を心掛ける。
- ・ 表情…できるだけ受容的態度や笑顔を心掛ける。

そして出来上がった自主教材が、ボディパーカッション教育である。しかし、カリキュラムに入っていないので、「特別活動」（学級活動、学年行事、学校行事、児童会活動）や「音

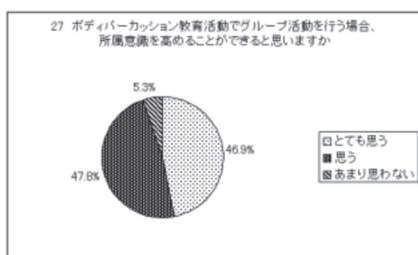
楽科」導入段階で15分程度行っていた。他の子ども達への働きかけのテーマとしては「望ましい人間関係づくり」をテーマに体で表現することの楽しさを伝え、言葉でうまく表現できない子もたくさんいる場合は具体的に見せることにした。A男が集中できれば他のみんなもできるはず。A男が楽しければみんなも楽しいはず。他の生徒にも達成感が味わえる教材にする。

A男とボディパーカッション教育を始めて約半年を費やした。この間にA男は落ち着きを取り戻し、他の教科の授業に対しても参加する姿勢を見せてくれるようになった。それは、このボディパーカッション教育によって「自分が参加できる場」があり「まわりの子ども達がA男を認めてくれる場（雰囲気）」ができたからだ考える。

同僚の先生方の前でこの授業（特別活動）を公開した時、A男が自然に参加していることに驚いていた。コミュニケーション能力とは、表現する力である。自分の思いを表現する、人前で表現する。これらのことは、第三者に自分の思いや願いを相手に伝える力であると考えている。ねらいとして下記のような点を達成できると考えた。

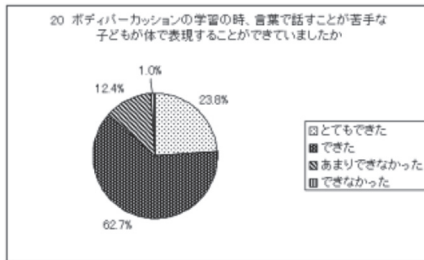
- 友だちと一緒に、気持ちとを合わせてボディパーカッション教育を楽しむことができる。（所属感） * 参照（図3-1）
- 友だちとリズムを重ね同じグループで一体感を味わう。（所属感） * 参照（図3-1）
- グループでのお互いの身体表現を見たり聞いたりしながら、お互いの個性や表情を認め合い、良いところを生かし合う。（自尊感情） * 参照（図3-2）（図3-3）

(図3-1)

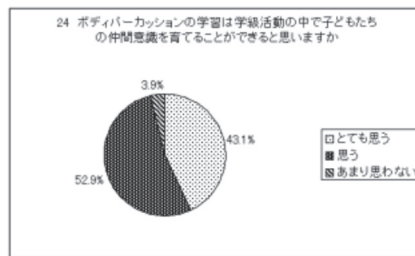


- 自ら進んでアドリブ（即興表現活動）で身体表現やリズムを考えて、友だちと協力してリズムを重ねる。（自尊感情） * 参照（図3-2）
- 自ら表現し、友達から認められる喜びを味わう。（自尊感情） * 参照（図3-2）
- 自ら考えたことを表現することで、それを見ている人を楽しませる。（自己実現） * 参照（図3-1）

(図3-2)



(図3-3)

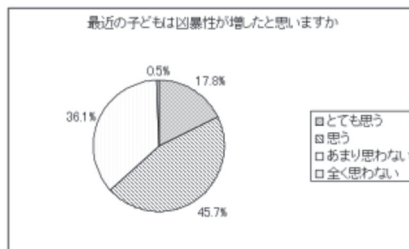


8 米国のキレル児童・生徒とリズム療法教育研究実践について (7)

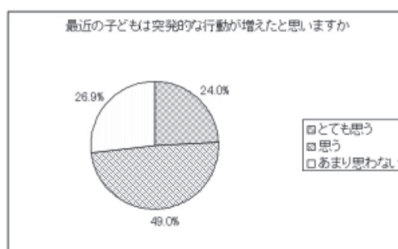
【米国におけるキレル生徒へのリズム活動の効果的な例】

下図の教師対象アンケート調査の(図2-9、図2-10)の結果より、アンケートに回答している教師の約80%が教師歴10年以上であることを考慮すると、日本でも子どもの凶暴性や突発的な行動は、以前に比べ増えているようである。

(図2-9)



(図2-10)



そこで、アメリカのキレル児童・生徒のリズム表現を療法の実例を紹介したい。リズムを同調させることは、オランダの科学者クリスチャン・ウィルスが1665年、同調かの法則を発見した。彼の発見は二つの振り子時計を隣り合わせにして、違った振り方をしても翌日にはリズムが同調している。

神経科学者で、コロラド大学音楽生化学研究センター所長のマイケル・ソート博士の説明によると「リズムの同調は、ある運動系の周期が、他の運動系の周期によって決定されること」(7)と説明している。

① 研究事例1 「危険をはらむ思春期の児童・生徒」より

場所 アメリカ ハーバービュー青少年センター

理由 怒りをコントロールする方法を教える必要性

担当 音楽療法士ケイ・シャーウッド・ロズカム博士

ドラムの合奏(様々な種類の太鼓を使用した演奏)は高校で危険をはらむ児童・生徒に対し、非常に効果のある使い方をされてきた。近年アメリカ国内の高校で頻発している暴力事件を見るにつけ、こうした児童・生徒に怒りをコントロールする方法を教える必要性が感じられている。

ドラムは思春期の児童・生徒が自然な形で自分の怒りに対処するのに役立つ方法だが、それにはさまざまな理由がある。ドラミングは、仲間を尊重する気持ちを必要とする行為であり、楽しく、鬱積した感情を解放する手段でもあり、より深い自己評価を芽生えさせてくれるようだ。このような活動は、日本でも教育、音楽療法関係者などが中心に参加し「ドラムサークル」として教育的に活動しており、筆者も数回参加しその効果を実感している。

② 研究事例2 児童・生徒の暴力を追放する「ドラム・ノット・ガン」

理由 危険な児童・生徒の暴力を追放するため

設立者 ハッピー・シェル

1997年に始められた組織「ドラム・ノット・ガン」は、危険な児童・生徒の暴力を追放するために1997年に始められた組織で、若者たちの世界にドラムを持ち込み、癒しの道具として利用している。

設立者のハッピー・シェルは、児童・生徒がストレスや怒りを感じた時に、自分自身や他者を傷つける代わりにドラムを叩かせることによって欲求不満を解消させるという活動を行っている。また、対象となった児童・生徒に、楽器の作り方も指導している。リサイクルセンターで材料を集め、ペットボトルや車用洗剤の空き缶をドラムに、柄をシェイカースティックに生まれ変わらせる。その後には、作った楽器を利用してリズムを創り出す方法を教える。

ハッピーによれば、一番重要なリズムは「心臓のリズム」だという。心臓の音はすべての癒しにおいて重要なカギとなるリズムと考える。すべてのリズムは心臓の音に端を発し、調和のとれたドラミングが続いている時、そこにいる全員が穏やかな気持ちとなり、目は生き生きと輝きはじめる。

そしてリズムは各々の人のからだの中を駆け巡る。「ドラム・ノット・ガン」はさまざまな環境の児童・生徒一家庭を失った児童・生徒、児童保護施設の児童・生徒、教会が運営する施設の児童・生徒、孤児その他多数一を対象に活動を続けてきた。

以上のように、アメリカでの実践的な取り組み二例を上げたが、アメリカの科学者のアンドリュー・ノーヤ博士はリズムカルなドラミングが中枢神経系に与える影響に着目し、ドラムのリズムによって被験者の脳波が α (アルファ)波や θ (シータ)波に同調する場面があることを発見している。

α (アルファ)波はリラックス状態や健全な心身状態で出る。脳波である、 θ (シータ)

波は通常、眠りに落ちる前の無意識に近い状態のときに出るとされている。「二つの脳半球つまり右脳と左脳が同一のリズムで機能している場合、頭がクリアになり高い意識状態が訪れる。

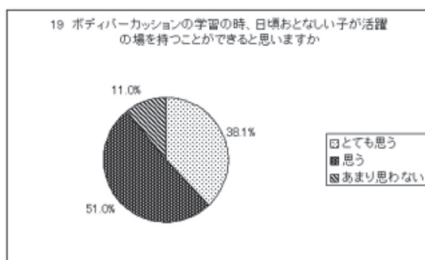
そして、左右双方の脳から同時に情報を引き出し、精神が鋭敏で明晰になり、通常よりはるかに早く情報を処理し、感情が容易に理解され変容するといわれている。また、現在の科学者たちは、こうした脳半球の同調化を意識の超越的な状態の神経科学上の説明になりうると考えている。」(7) 以上のことを考えると、リズムカルな活動は思春期の児童・生徒において脳波を同調させ、精神はリラックスさせ、心の安定状態に持っていくと考えられる。

具体的には、リズムの要素によっては若者たちの心の中に潜んでいた攻撃的衝動が開放のチャンスを得られ、リズム活動が他のみんなと同調させていく過程によって、攻撃性や敵対性という衝動が発散され、同時に心がなごむ時間と空間を体験することができるのではないだろうか。怒りの発散と、催眠的なトランス状態の組み合わせにより、児童・生徒の心の中にある自己防衛の気持ちを和らげ、児童・生徒が本来持っている、他者を受け入れ、コミュニケーション能力が高まり心を安定させる方向に行くと考ええる。

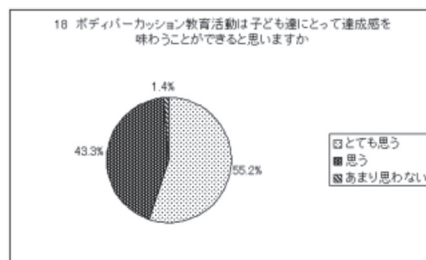
9 全国アンケート調査結果で得られた児童・生徒のコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の可能性

下図の、図3-4、3-5のアンケート結果、「ボディパーカッションの学習の時、日頃おとなしい子どもが活躍の場を持てるか?」の質問に対して、約90%の子どもが活躍できると回答している。また、「子どもたちにとって達成感を味わうことができるか?」という質問に対しても98%、こ以上で達成できると回答している。これは予想以上の結果であり、活動している子ども達の状況を教師が客観的に観て、子ども同士がボディパーカッション教育を通してコミュニケーションが取れ、達成感を味わっていると考ええる。

(図3-4)



(図3-5)



(1) 学校教育「特別活動」から生まれたボディパーカッション教育と米社会教育学者マズローの「欲求5段階説」との関連(8)

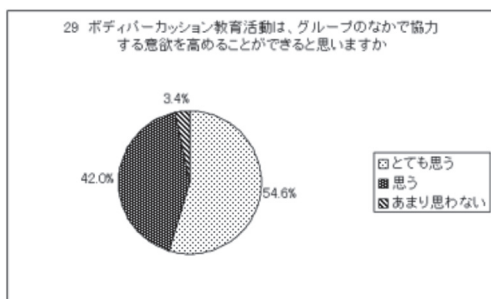
学習指導要領「特別活動」の考え方の根幹にもなっている米社会学者マズローの「欲求5段階説」を参考に、子どもの「自己実現」を達成することを考えてみた。

子どものコミュニケーション能力を高めることにつながると考えた。この場合、「コミュニケーション能力が高まる活動」を3つのステップに分けて考えてみた。

Iステップ

所属意識の確認

(図3-6)



グループに所属する楽しさ

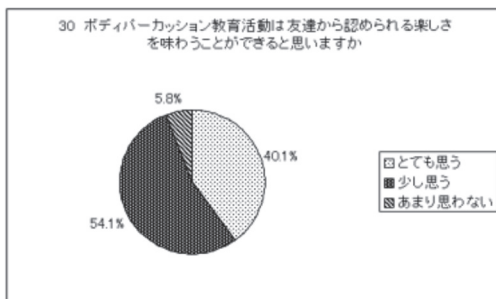
Iステップはグループの中で協力して「グループに所属する楽しさ」である。「ボディパーカッション教育は、グループで協力する意欲を高める」と答えた人が95%を超えていた。(図3-6)

これはグループの中での自己の存在感見出し、そこからグループ内での所属間を感じる事が大切ではないだろうか。そこに、グループの中で協力する意欲が生まれると考える。

IIステップ

自尊感情の高まり

(図3-7)



友達から認められる楽しさを味わう

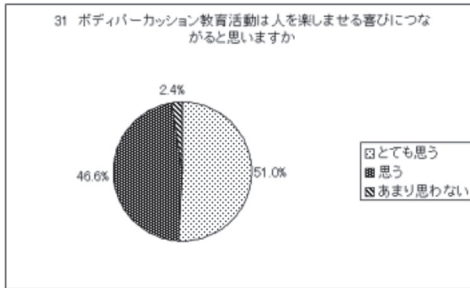
IIステップはリズム活動で自分の思いを友達に伝え「友達から認められる楽しさ」である。アンケートの結果は「とても思う」、「少し思う」の合計が94%であった。(図3-7)

これは、グループ内での自己の存在感をアピールできることでより積極的な活動や考え方が生まれそれによって他社への配慮も生まれるという考え方である。そのことで、自己のアイデンティティがグループ内で確立され自尊感情が満たされると考える。

Ⅲステップ

自己実現へ追求

(図3-8)



他者を楽しませ、自己実現を追求する楽しさ

最後に、Ⅲステップのリズム活動で意欲的に自己表現を行い「自己実現を追求する楽しさ」につながっている。

アンケート結果では、97%を超えており「人を楽しませる活動」として教師は認識している。(図3-8)

具体的には、自分たちの完成した表現作品を総合的な学習、学級活動、授業参観、学校行事さらには、福祉施設などでの訪問学習などと一緒に披露することで自己実現を図ることができる。この自己実現とは、自分が行った行為によって、他の方々の楽しみや喜びに変わることである。このことが、将来的には大人になっての社会貢献等の活動につながり自己の成長を追求することになると考える。

以上のようなことからわかるように、グループの所属意識から友達から認められる活動に発展し、その後即興的な表現活動を行い、そのことを発表することで自己実現に繋がっていくと考えている。この場合は、児童生徒同士が協力して所属感を味わい、お互いの立場や役割を認め合い、何かを一緒に行い他者に「感動」「喜び」「楽しみ」を与えとができたことが、「成就感」「達成感」「一体感」につながる大切な要素になってくる。

ボディパーカッション教育は、一番身近な自分の身体を使って、簡単な手拍子を中心に、他の人といっしょにリズムを合わせる教育活動である。それが「友達同士の連帯感」や「一体感」につながり、「所属意識」意識から発展して「自尊感情の充実」「他者の認知」、さらには「自己実現」につながる。教育者はこのような子ども自身の存在感を発揮できる教育環境を設定することが、子どものコミュニケーション能力を培うと考えている。

【注】

- (1) 平成15年度新学習指導要領より「総合的な学習の時間」より
- (2) ジョン・デューイ、市村尚久訳『経験と教育』講談社学術文庫 2004年、p34
- (3) 全国の教職員研修を対象に2001年～2016年まで山田俊之が講師を務め、小中高校、特別支援学校教師約30,000人が受講したボディパーカッション教育講座。内容は、特別活動や学級経営、音楽科、特別支援教育の授業におけるボディパーカッションの活用を理論編(考え方)と実践方法について演習(ワークショップ)をしている。
- (4) 八尾坂修『巻頭言 現行学習指導要領の理念と学習指導要領改訂の視座 2.改正教育基

本法等を踏まえた学習指導要領改訂の視座 (2) 教育内容に関する主な改善事項③各教科における言語活動の充実。』2008九州教育経営学会研究紀要p5

- (5) マジョリー・F・ヴァーガス、石丸正訳『非言語（ノンバーバル）コミュニケーション』新潮選書 1987年、15p
- (6) 山田俊之「ボディパーカッション入門」音楽之友社2001 ボディ…身体 (body)、パーカッション…打楽器の総称 (percussion)
- (7) ロバート・ローレンス・フリードマン、佐々木薫訳『ドラミング リズムで癒す心とからだ』音楽之友社 2003年、60p
- (8) アブラハム・マズロー (1908年～1970年 A.H.Maslow アメリカの心理学者) は、彼が唱えた欲求段階説の中で、人間の欲求は、5段階のピラミッドのようになっていて、人間の欲求の段階は、生理的欲求、安全の欲求、親和の欲求、自我の欲求、自己実現の欲求。

【アンケート概要】

アンケート調査については趣旨を2010年に日本カリキュラム学会（佐賀大学）で行った。アンケート調査を行った先生の送付先住所は、受講者が感想文に自筆で記入した住所から、全国を網羅するように約800人を無作為に抽出した。

- ・対象校種：小学校、中学校、高等学校、特別支援学校（旧養護学校、聾学校、盲学校）
- ・発送期間：2007年（平成19年）1月～2015年（平成27年）3月
- ・集計期間：2008年（平成20年）～2016年（平成27年）8月
- ・アンケート発送数：1000名（全国47都道府県小・中・高校、特別支援学校800校へ送付）
- ・有効回答数：約362名
- ・研究責任者：山田俊之
- ・研究指導者：九州大学大学院教授 八尾坂修（初回アンケート発送時）
- ・研究機関：九州大学大学院人間環境学府教育システムコース博士後期課程

【参考文献】

- (1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課2007『「特別支援教育支援員」を活用するために』
- (2) 特別支援教育に関する中央教育審議会答申2005『「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」より』文部科学省
- (3) 八尾坂修2005『学校改善マネジメントと教師の力量形成』第1法規株式会社
- (4) T・E・デール、K・D・ピーターソン著 中留武昭・治佐哲也・八尾坂修訳2002『学校文化を創るスクールリーダー』風間書房

-
- (5) 山田俊之2008『子どものコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の効果に関する基礎的研究』九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門平成19年度「社会人支援研究助成」報告書
 - (6) 山田俊之2000「ボディパーカッション入門」音楽之友社
 - (7) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2004『生徒指導資料第一集』国立教育政策研究所
 - (8) 山田俊之2007『子どものコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の可能性』九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻修士論文
 - (9) 国立教育政策研究所2003「児童生徒の心の健康と生活習慣に関する調査」文部科学省
 - (10) マジョリー・F・ヴァーガス 石丸正訳1987年『非言語（ノンバーバル）コミュニケーション』新潮選書
 - (11) ネス・E・ブルーシア著 林庸二監訳、生野里花・岡崎香奈・八重田美衣訳1999『即興音楽療法の諸理論』人間と歴史社
 - (12) 第44回NHK障害福祉賞入選作品集2009「聴覚障害があっても音楽は楽しめる！体がすべて楽器です」（山田俊之）2009 NHK 厚生文化事業団
 - (13) 山田俊之2009「九州大学大学院教育学コース院生論文集飛梅論集第9号「生徒のコミュニケーション能力を高めるボディパーカッション教育の展望」～特別支援教育発展の手がかりとして～」九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース－ 55

An effect and possibility of the educational body percussion which I thought about from national questionnaire findings — I study rhythm body activity for a student to raise communicative competence —

Toshiyuki YAMADA

Kyushu woman Junior college

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kita-Kyusyu City, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

This research is considered about its possibility based on a questionnaire survey of a body percussion educational workshop member of a class about the effect which improves the student's communication ability through the body percussion education which works on the activity that a child and between the students made non-language the center based mainly on a rhythm body expression and grows capacity to express oneself.

Body percussion education develops from this thing into the activity admitted from a friend from belonging consciousness of a group, and it's leading to self-actualization by doing improvised artistic activities and announcing the thing after that. That connects with the togetherness with the friend and "sense of togetherness" together with rhythm together with other people focusing on easy beating time with the hand using its closest body for body percussion education.

I can think child's communication ability rises further by this thing. The communication ability by which it's for child's basic ability formation that an educator establishes the educational environment which can show such child its existence sense is grown, an important thing.

Key Words: Communicative competence, Educational body percussion, Rhythm body activity